

事例

1

# 適切な表現を選ぼう (三年)

「たから島のぼうけん」と「言葉を分類する」を関連させて

北海道札幌市立西岡小学校教諭

安尻太郎

語彙を増やしていくために、本を読んだり、授業で学んだりして新たな言葉に触れ、その働きを理解するのは大切なことです。しかし、それ以上に欠かせないのは、実際にその言葉を自分の思いや考えを伝えるための媒介として用い、「効果的な役割を果たしている」「これからも使えそうだ」と実感することです。つまり、働きの理解に留まるのではなく、繰り返し表現していくことが、使える言葉を増やしていくために肝要なことなのです。

言語事項の指導であっても、子どもに学ぶ目的意識をもたせることは大切です。そこで、物語を書く教材「たから島のぼうけん」(三年下p63-66)と、言語教材「言葉を分類する」(三年下p68-71)を関連させて学ぶ単元を設定しました。

まず、「学校図書館に三年生の創作コーナーを作るので、すてきな物語を書いてほ

しい」という依頼が司書教諭から来たという設定をします。子どもたちは、物語を書く際には、「おもしろい展開を書きたい」という内容面の工夫に重きを置きがちです。しかし、学校図書館に置くとなれば、他の学年、特に一、二年生が自分の書いた物語を読むという状況を考慮しなければなりません。内容面だけではなく、適切に表現を工夫してイメージが伝わりやすいようにするという意識を生むことができます。

「言葉を分類する」は、物語の下書きに取り組んでいる間に、並行して実施することが効果的だと思います。教材では、「動きを表す言葉」「様子を表す言葉」「物や事を表す言葉」という分類(品詞)に着目させています。今回は、これらに加えて、類義語や対義語についても分類の観点として扱うことにしました。さまざまな分類に言葉を当てはめていくことで、その特徴や使

い方についての気づきが生まれるからです。

## 文から想像したことと、ずれから

まず、次の一文を提示し、その様子を思い浮かべるよう投げかけます。

わたしは、家を出て駅に行った。

子どもたちは、「歩いている様子が浮かんだ」「仕事に向かう人かな」などと想像します。

そこで次に、「皆さんの頭に浮かんだ人は、このような様子ですか」と、左ページの絵(※1)を提示します。

すると、「想像していたのとは違う!」「こんな人はイメージできない!」「こんな様子は、書かれていなかったよ。言葉が足り

ないよ」など、文には情報が不足していることを指摘し始めます。そこで、文の中に、次のような空白を書き加えました。

わたしは、  
家を出て駅に行った。

そして、空白にどのような言葉を入れるべきか尋ねます。今回は、左の四つの言葉(※2)を取り上げ、伝えたいイメージ(絵)にぴったりに当てはまる言葉はどれなのかを考えることにしました。



▲※1 教師が提示した絵

急いで  
あわてて  
あせって  
一生けんめいに

▲※2 四つの言葉

## 微妙な違いを感じる

グループごとに、短冊に書いた四つの言葉を、絵と見比べながら文に当てはめてみます(※3)。声に出して確かめ、言語感覚を働かせてじっくりくる言葉を探していきます。文と短冊は、グループに一セットのみ渡すことで、自然な形で話し合いを生

み出すことができます。

全体交流の場では、各自がぴったり当てはまると考えた言葉とその理由を発表するようにします。

- ・絵を見ると汗をかいているから、「急いで」がぴったりだと思う。
- ・困っている様子を伝えたいのなら「あわてて」のほうが、よい気がする。
- ・「一生けんめいに」は、何だか変な感じがするから、この絵には当てはまらないよ。

普段、違いをあまり意識しない類義語であっても、少しずつニュアンスの違いが明らかになっていきます。

さらに、考えの理由を明らかにする中で、「大事な約束があつて、遅れると大変だから『あわてて』いると思うよ」「きつと、前の日も遅刻して怒られているから、そう

とう『あせって』いるのかな」と、文と絵を行き来しながら、その背景にありそうな物語の展開を想像して、考えるようになります。「似ているけれど、これはちょっと違う」「私ならこの言葉を使う」と、自分の伝えたいことに合わせて言葉を選択して用いる価値に気づいていくのです。

## 自分の物語に生かしていく

言葉をじっくり考えて使う大切さを学んだ子どもたちは、自分の書いている物語の言葉を見直そうとします。まずは、登場人物の様子が適切に表されているか目を向ける推敲の時間を設定します。客観的に自分の作品を評価することが難しい場合もありますので、友達どうしでの相互推敲が効果的です。不足点の指摘だけではなく、伝えたいことに適した言葉を一緒に探るような雰囲気も生まれると、一人では思いつかない言葉に触れることができ、使える言葉はさらに増えていくと思います。

語彙を増やしていくためには、より適切な言葉を求める意欲をいかに子どもの中に生み出すか、そして、言葉を吟味する経験をどれだけ積み重ねられるかが、大切だといえそうです。



▲※3 どの言葉が適切か、グループで話し合っている様子